



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	遠隔農業地域における住み込み援農ボランティアの成立要因：北海道遠軽町E農場を事例として
Author(s)	宮川, 竜吾; Miyagawa, Ryugo; 東山, 寛 他
Citation	北海道大学農経論叢, 78, 73-81
Issue Date	2025-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94427
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_miyagawa.pdf



遠隔農業地域における住み込み援農ボランティアの成立要因 －北海道遠軽町E農場を事例として－

宮 川 竜 吾・東 山 寛*

Factors Contributing to the Formation of Live-in Agricultural Volunteers in Remote Agricultural Areas: A Case Study of Farm E in Engaru Town, Hokkaido

Ryugo MIYAGAWA, Kan HIGASHIYAMA*

Summary

Agricultural volunteers are expected to be the leaders of agriculture, providing citizens with ongoing support for farmers' farm work. The key challenge in establishing agricultural volunteers is to gather people, and many volunteers have been established in the suburbs of cities by bringing in residents from nearby areas. On the other hand, Farm E in Engaru Town, Hokkaido, Japan, despite its remote location, has successfully addressed this issue by attracting people from far away and having them live on farms, resulting in 200 volunteer applicants and 50 participants. This paper clarifies the actual situation of this farm as an advanced case of live-in agricultural volunteers in a remote farming area, and discusses the factors that contributed to its success, so that farmers in remote farming areas can introduce agricultural volunteers as a means of ensuring their workforce in the future. As a result of the discussion, it was found that the factors that contributed to the success of the project were (1) information dissemination through the website, (2) an attitude toward accepting volunteers, and (3) the corporate philosophy of the farm.

Key words : bearers, remote agricultural areas, agricultural volunteers, text mining

1. 背景と課題

1) 研究の背景

農業における労働力確保の取り組みの一つとして、市民が農家の農作業をボランティアとして継続的に支援する「援農ボランティア」(または農業ボランティア)が知られるようになってきた。この取り組みは一般的に、農業関係機関や中間支援組織が市民と農家を仲介し、マッチングを支援することで成り立っている。実際に東京都の公益財団や神奈川県が主体となり、援農ボランティアのマッチングを支援している実例が良く知られている。援農ボランティアは農業の支え

手、あるいは「多様な担い手」として期待されている存在である。

また、これらの取り組みは主として、大都市圏の近郊において、都市住民の「農業を体験したい」「健康のために農業をしたい」といった要望を取り込むことで成立している。他方、北海道も含めた遠隔農業地域における援農ボランティアの取り組みはこれまで想定されていなかったが、北海道東部のオホーツク管内遠軽町のE農場による「住み込み援農ボランティア」の取り組みが知られるようになってきた。2016年から始まったこの取り組みは、2023年において応募者が200名、参加者が50名の実績を残しており、遠隔農業地域における継続的な取り組みとしては唯一無二のものと言って良いだろう。

*Corresponding author: khiga@agr.hokudai.ac.jp

遠隔農業地域では都市近郊と異なり、人を集めるところがまず課題となる。E農場の事例は、全国から人を募集し、住み込み型の援農ボランティアの成立が可能であることを示している。今後、遠隔農業地域の農業経営が労働力を確保するひとつの手段として、あるいは雇用に頼らない農業経営を成立させる方策として、援農ボランティアを位置づけることができるのではないか、というのが本研究の問題意識である。その上で、E農場の事例研究を行い、その実態を把握すると共に、住み込み援農ボランティアの成立要因を明らかにすることが必要である。

2) 既存研究の整理

援農ボランティアを対象とした代表的な研究である後藤ほか(2022)は、援農ボランティアに関する既存研究の整理を通じて、研究の着目点を①農業経営に与える効果、②援農ボランティア制度の構築、③援農ボランティアの参加・定着要因の3点に整理している。これまでの研究は、当然のことながら大都市近郊の援農ボランティアを事例としており、遠隔農業地域で展開することを想定していない。

本研究では、後藤ほか(2022)の整理を参考にしながら、E農場を遠隔農業地域で援農ボランティアの仕組みを構築した典型事例として捉え、①援農ボランティアが労働力としてどのような位置づけにあるのか、また、援農ボランティアを利用することで、農業経営にどのような影響や変化が生まれているのか、②E農場に全国から援農ボランティアが集まる要因は何か、また、援農ボランティアはどのような点に魅力を感じ、評価しているのか、という2つの観点を採用し、実態分析を行うこととしたい。

3) 課題の設定と本論文の構成

本研究は、繰り返しになるが、遠隔農業地域において住み込み援農ボランティアの仕組みを定着させることに成功した先進的事例として、道東・遠軽町に所在するE農場を取り上げ、取り組みの実態を明らかにすると共に、その成立要因を考察することを課題とする。

実態調査については、2023年7月及び11月にE農場を現地訪問し、農場主のE氏への聞き取り調査を実施した(資料収集を含む)。また、今回は

援農ボランティアの参加者に対する直接的な調査を行うことはできていないため、E氏からボランティア応募者のメールを38名分、農場のホームページに随時掲載していたボランティア参加者の声(「過去の仲間の声」)の情報を36名分提供してもらい、分析を加えることとした。

以下では、まず第2節でE農場の概要を述べる。続く第3節では、E農場における住み込み援農ボランティアの仕組みと実績、また、援農ボランティアが労働力として、どのようなかたちで位置づいているのか、という点に特に着目して実態分析を行う。第4節では、ボランティア参加者の援農ボランティアに対する興味関心にアプローチするため、その志望動機にもとづいたテキストマイニングを用いた分析を行う。最後に第5節では、遠隔農業地域における住み込み援農ボランティアの成立要因を考察し、今後の展望を述べる。

2. E農場の概要と経営多角化の展開

E農場の経営概要(2022年)を簡単に述べておく。経営面積は42haであり、小麦(20.6ha)、甜菜(10.3ha)、馬鈴薯(8.0ha)の畑作3品に、スイートコーン(2.5ha)、ブロッコリー(0.6ha)を加えた畑作経営である。馬鈴薯は食用(きたあかり、男爵、インカのめざめ等)と加工用(トヨシロ、オホーツクチップ、きたひめ)の双方を栽培しており、地域の特産品(白滝じゃが)である馬鈴薯は、E農場の基幹作物である。労働力は経営主と妻の夫婦二人を基幹とし、若干の臨時雇を導入しているが、それをはるかに上回る人数の援農ボランティアがE農場の農作業に従事している(後述)。E農場の売り上げは5,000万円を超えるが、そのうち農業部門が4分の3、残る4分の1は経営多角化による収益となっている(聞き取りによる)。

E農場は2012年以降、段階的に多角化事業を展開しており(第1表)、ここでは7つの事業部門に整理している。住み込み援農ボランティアの受け入れを開始したのは2016年である。その前段で、体験事業(2014年)、宿泊(農泊)事業(2015年)を手がけており、2022年には飲食(農家レストラン)事業を開設した。これは、E氏が

第1表 E農場の多角化事業の概要

事業名	開始年度(年)	事業内容
直接販売 加工事業	2012	収穫物・馬鈴薯加工品のネット販売等
体験事業	2014	農業体験の運営 野菜の収穫体験や畑ツアーを実施.
宿泊事業	2015	農家民宿の運営 自宅2階と近隣の空き家を改装し運営.
ウェブ事業	2015	農場ホームページの運営 宿泊事業の予約受け入れや農産物のネット販売など.
ボランティア 事業	2016	住み込みボランティアの受け入れ
教育事業	2016	企業を中心とした農業体験研修の受け入れ
飲食事業	2022	農家レストランの運営

資料：実態調査より作成.

第2表 E農場の作業スケジュールとボランティアの従事内容（2022年）

作物	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
甜菜		播種 (移植用)	播種 (直播)	移植・補植		雑草取り			収穫	
馬鈴薯	通販・箱詰め発送		種芋選別 準備芋切り	植え付け				収穫・選別		通販 箱詰め発送
スイートコーン				播種				収穫		
秋まき小麦		融雪	追肥			収穫		播種		
ブロッコリー				苗植え		収穫				
ボランティアの 月毎の従事内容	・馬鈴薯の 通販、発送	・甜菜播種 ・木材切り	・甜菜苗の 移動 ・馬鈴薯の 種芋準備 ・石拾い	・甜菜移植と 補植 ・ブロッコ リー苗植え ・馬鈴薯移植	・馬鈴薯移植 ・ブロッコ リー苗植え	・ブロッコ リー収穫 ・雑草取り	・ブロッコ リー収穫 ・雑草取り	・馬鈴薯収穫 と選別 ・防獣ネット 張り	・馬鈴薯収穫 と選別 ・甜菜収穫	・後片付け (機械の掃除 や電気柵の片 付け)
通年従事	農家民宿・レストランの運営 食品加工（道の駅で販売する「インカのまる揚げ」の下処理）									

資料：実態調査より作成.

大事にしているコンセプトである「人が集まる農場」に沿った事業展開である。決して小さな規模ではない畑作農業に加えて、これだけの多角化事業を従業員も雇わずにE氏夫妻が展開できているのは、「人が集まる農場」というコンセプトのもとで、住み込みボランティアが日常的な営農活動を支えているからと言えよう。

3. 住み込み援農ボランティアの実態

1) 受け入れの概要

ボランティアの受け入れは年間50人程度であり、道外からの来訪者が9割を占め、女性比率も

9割である。また、属性では学生が8割を占め、残る2割は社会人である。ボランティアは2月から11月にかけて常時3人（農繁期は4～5人）ほど滞在しており、1日の労働時間は8時間としている。週休は1日ないし2日である。E農場では農作業に必要な衣服等に加えて食・住を提供し、休日はボランティア向けのレクリエーションも企画している（後述）。

2) 年間の作業内容

(1) 作業内容

第2表にE農場の年間作業スケジュールとボランティアの従事内容を示した。ボランティアは農

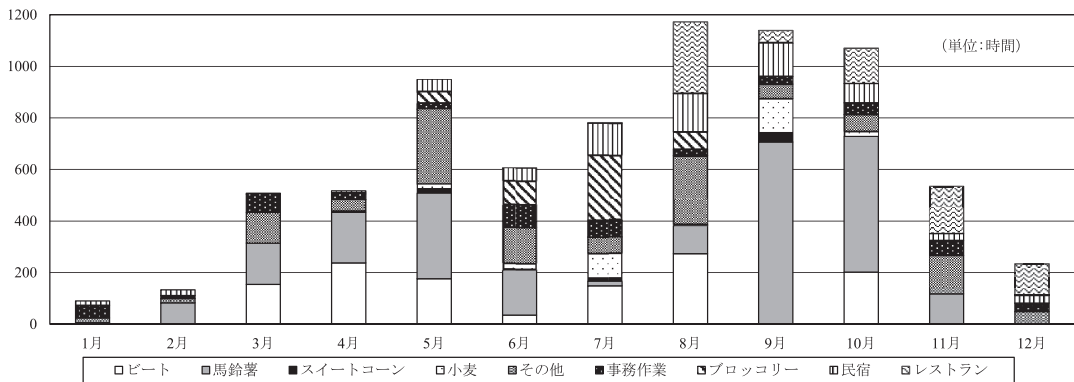
業機械の操作を除く、各作物の作業全般に従事している。手取り除草や石拾いなどの簡易的な作業から、馬鈴薯の収穫作業の補助（ハーベスターの機上選別等）のような難易度の高い作業まで、幅広い農作業に従事する。農作業に従事するボランティアの1日の流れは、6:45起床、朝食、午前の農作業従事（7:30～12:00、途中休憩あり）、昼食休憩、午後の農作業従事（13:00～17:00、途中休憩あり）、その後17:00～19:00にシャワーと夕食をとり、19:00以降は自由時間である。

(2)労働時間

E農場の記録にもとづき、第1図は月別・種類別労働時間を、第2図は労働力の構成（E氏夫妻、臨時パート、ボランティア）別にみた月別労働時間をグラフ化して示したものである。

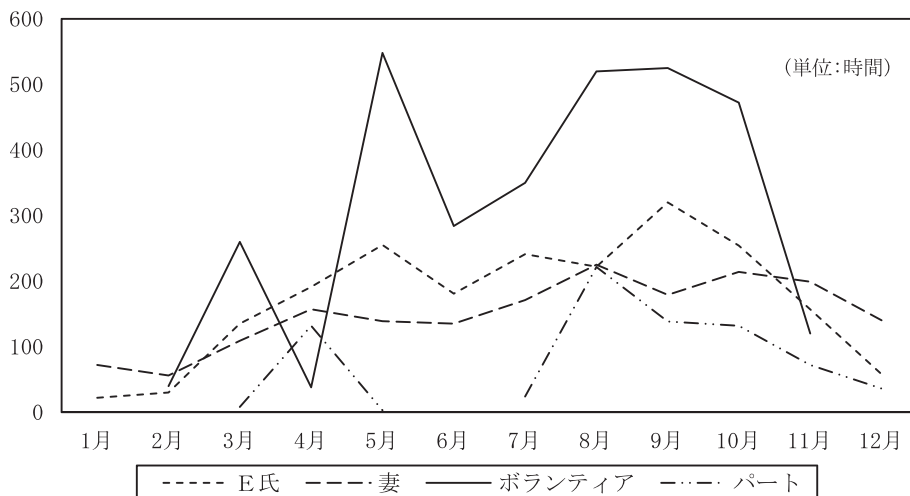
農作業のピークは5月（春作業）と9～10月（秋作業）にあるが、ブロッコリーの収穫がピークを迎える7月の労働時間も相応に大きく、7月から9月は農泊の最盛期がこれに重なるかたちとなっている。

ボランティアの労働時間に着目して見てみると、5月と8～10月の労働時間が顕著に大きく



第1図 E農場の月別・種類別労働時間（2022年）

資料：実態調査より作成。



第2図 労働力構成別にみた月別労働時間（2022年）

資料：実態調査より作成。

第3表 休日のレクリエーションの内容

ボランティアの希望	E氏の対応	ボランティアの希望	E氏の対応
農業を学びたい	・農業経営や耕作方法、作物について教える。	田舎暮らしを体験したい	・ドラム缶風呂の製作。
自然を満喫したい	・星空観測や川釣りなど。	食品に興味がある	・食品開発や食品加工の手伝い、 ・ピザ窯の製作。
北海道を満喫したい	・かまくら作りやカーリングなど。	建築に興味がある	・小屋の建築の手伝い。
地域の文化を学びたい	・地域の住民を招いたイベント企画、 ・地域のお祭りに同伴。	地方創生に興味がある	・E氏の経営多角化の経験をもとに、地域活性化について議論。
体を動かしたい	・乗馬体験や登山など。	就職活動を行っている	・E氏の前職の経験を伝える。

資料：実態調査より作成。

なっており、援農ボランティアがE農場の農作業の相応の部分を担当していることが読み取れる。トータルの労働時間はE氏が年間2,000時間、妻が1,800時間と決して短くはないが、ボランティアの総労働時間は3,000時間を超えており、全体の41%を占めている。

他方、地元雇用の労働力である臨時パートの労働時間は全体の1割程度を占めるに過ぎないが、甜菜の移植や馬鈴薯の収穫時の補助労働力として熟練パートは貴重な存在であり、E氏としても現在のウェイトを維持していく意向である。

3) 受け入れ体制

E農場ではボランティアに対し、食・住の提供に加えて労災保険の加入や交通費の支給、また、休日のレクリエーションを提供している。食事については、E氏の妻が用意した料理を3食、リビングでE氏夫妻と一緒に食べるようにしている。住居については、基本的に自宅2階の3部屋を1人1部屋の個室で提供しており、同居するかたちをとっている。なお、交通費については、札幌駅から白滝までの高速バス料金をE農場が負担している。

休日のレクリエーションの内容について第3表に整理した。E氏はボランティアひとりひとりに即して、要望を把握し、それに応えるような企画を心掛けている。ボランティアは様々な動機と期待を抱いてE農場を訪れており、E氏の対応も画一的なものにはなり得ない。単なる労働力ではないボランティアへの対応の難しさは、こうしたところに現れているのかもしれない。

4) 実績と変遷

第4表にE農場のボランティアの受け入れにか

かわる沿革をあらためて整理して示した。以下では、応募・受け入れ人数の急増について補足しておきたい。

応募・受け入れ人数に関しては、2015年の農場ホームページの開設が大きな効果を発揮している。2014年まではリピーターに期待したり、参加者の友人関係を頼ったりしての確保であったが、2015年からはホームページを通じた問い合わせと志願者が急激に増え、受け入れのキャパシティを上回るようになった。当初は先着順で採用していたが、参加者の理想・想像と実際の農場生活にギャップが生じてリタイア者が出たことをきっかけに、選考方式に変更してミスマッチを防ごうとしている。

また、ホームページでも募集要項を掲げると同時に、過去のボランティア参加者の声（「過去の仲間の声」）を掲載し、楽しかったことだけではなく、大変だったこともわかるように工夫している。楽しかったこととして挙げられているのは、農作業や食・住のサービス、休日のレクリエーションなどであるが、慣れない農作業は大変だったこととしても紹介されており、農場での生活リズムも、どちらかと言えばこちらのカテゴリーに含まれるようだ。次節では、ボランティア参加者（及び志願者）の志望動機について、この「仲間の声」での記述も含めた分析を行っておきたい。

4. 援農ボランティアの志望動機

1) データの概要

本分析で扱うデータは、冒頭に述べたように、①応募者のメール（38名分）と、②テキストデータである過去の参加者の声（36名分）である。①

第4表 E農場のボランティア受け入れに関わる沿革

年	名称	応募人数	受け入れ人数	活動内容
2012				・就農、5人ほどの地域の農業経験者に手伝ってもらう。 ・人手不足に危機意識。
2013	住み込み アルバイト	約5人		・大学の調査や講義で学生との繋がりを得て、住み込みアルバイトを企画。
2014	住み込み ボラバイト	15人		・受け入れ人数を増やすため、給料は半額だが、食・住とおやつを無料にした“住み込みボラバイト”を企画。
2015		50人		・農場ホームページの開設を機に受け入れ人数が急増。 ・参加者の多くが報酬よりも体験を重視していることを認識し、来年からボランティアに変更することを決意。
2016	住み込み ボランティア	50人		・住み込みボランティアを開始。 ・外国人も受け入れるためHPに英語版を追加し、外国人の応募が増加。
2017		70人	50人	・応募者が受け入れ人数を上回り、先着順で採用するようになる。 ・参加者の理想や想像と現実ギャップが生じ、リタイア者が出てしまう。
2018		200人	70人	・ミスマッチの対策として、選考方式を採用。 ・住居を改修して個室を増やし、受け入れ人数も増加。
2019		200人	70人	
2020		200人	40人	・コロナ禍に入り、受け入れ人数を減らす。一方で滞在期間が長い人を優先的に採用したため、全体の労働量は変化していない。
2021		200人	40人	
2022		200人	40人	
2023		200人	50人	・コロナが落ち着き、受け入れ人数を徐々に増やす。

資料：実態調査より作成。

註：応募人数と受け入れ人数は聞き取りで把握したおよその人数である。

はボランティア志願者がE農場に送信したメールであり、内容は氏名・職業等・性別・年齢・居住地・志望動機・自己PR、となっている。ただし、必ずしも全項目が記載されていないケースもあり（面談時に補足するため問題なし）、本データの中にも一部欠落しているものが見受けられる。また、本データにおいて採用者と不採用者は区別されておらず、不採用者の志望動機も含まれている。②はE農場のホームページに掲載されたものであり、主な内容は性別・職業等・年代・居住地・活動期間・体験した農作業・志望動機・感想（楽しかったこと／大変だったこと）である。①と②の合計は74名分であり、欠落分を考慮すると58名分の志望動機を収集することができた。なお、①と②の記述が同一人物である可能性も含まれるが、個人を特定する情報が得られていないため、本分析では考慮していない。

2) テキストマイニングを用いた分析

本分析では樋口耕一が開発したテキストマイニングソフト「KH Coder 3.Beta.07f」を用いた。テキストマイニングでは、文章データを単語ごとに切り取り、内容の把握に重要な名詞、動詞、形容詞などを抽出する。テキストマイニングを行う前

処理として、「ホームページ」「WEBサイト」「HP」のような表現が異なる同義語を一つの単語に変換した。また、結果の解釈に不要な「思う」「考える」「楽しい」などを使用しない単語として指定し、分析対象から除外した。また、「E農場」や「ファームステイ」など、一つの単語として認識されないものを強制抽出語として指定した。テキストデータの総抽出語数は6,291語であり、総文数は201文であった。

以下ではまず、上位に登場する志望動機と感想の頻出単語を示す。次に、単語間の関係性を確認するため、文章データの単語と単語の繋がりがや出現パターンの類似性を可視化する共起ネットワークによる分析を行った。その上で強い関係性を持った単語群をカテゴリー付けし、文章データから文脈を参照して文章を構成した。以下では便宜的に、抽出語を『』、抽出したカテゴリーを【】で示すこととする。

(1) 志望動機の頻出単語

第5表に志望動機の頻出単語を示した。表に示るように『農業』『体験』『E農場』『ボランティア』が最上位にあり、多くの応募者が農業の体験とE農場での援農ボランティアに直接の興味関心

第5表 志望動機の頻出単語

(上位50, n=58)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
農業	79	学ぶ	12	環境	8
体験	40	今	12	関わる	8
E農場	33	行く	11	好き	8
ボランティア	31	持つ	11	住み込み	8
経験	30	地域	11	お話	7
北海道	30	ファームステイ	10	今回	7
自然	27	作る	10	参加	7
感じる	22	農家	10	志望	7
興味	20	農作業	10	時間	7
生活	18	聞く	10	自身	7
大学	18	魅力	10	食	7
知る	16	仕事	9	新しい	7
見る	14	将来	9	探す	7
実際	14	食べる	9	挑戦	7
人	14	コロナ	8	普段	7
理由	13	ファーム	8	良い	7
ホームページ	12	過ごす	8		

資料：筆者作成（分析方法は本文参照）。

をもっていることがうかがえる。

他方、必ずしもE農場に限定されたものではない『北海道』『自然』のような単語も頻出している。しかしながら、このことはボランティアが自然を体感できる場所としても、遠隔農業地域を評価していると読み取ることも可能である。北海道の遠隔農業地域の場合、アピールの仕方によっては、遠隔地であることがボランティアを惹きつける強みのひとつになり得ることを示唆していると言えよう。

そこで、これらの原文における出現パターンを確認するため、共起ネットワークによる分析を行った。分析に当たって、最上位の頻出単語を共通カテゴリー、その他の単語を多様なカテゴリーとして区別することとした。

(2)志望動機の共起ネットワーク

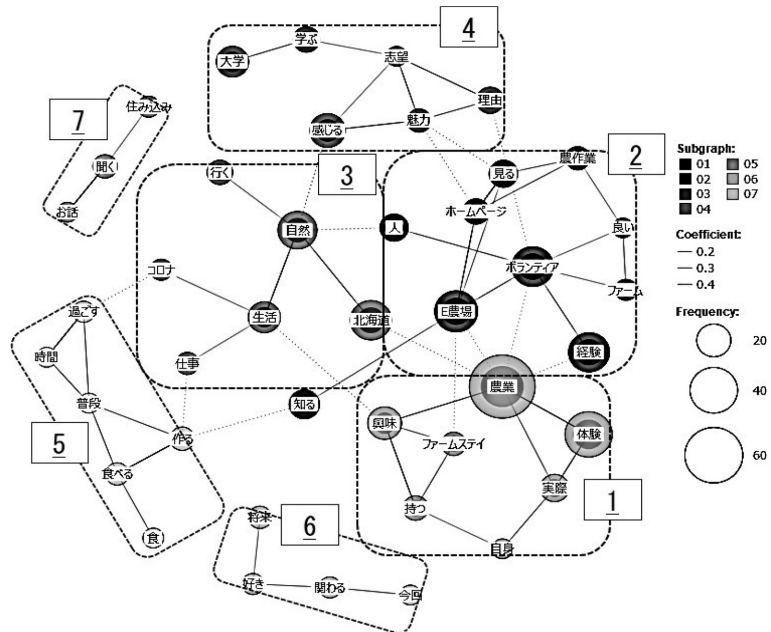
第3図に共起ネットワークの分析結果を示した。出現頻度の多い単語ほど大きい円で示され、円を繋ぐ線が単語間の関係性（出現パターン）を示している。比較的強く結びついているグループは色分けされており、これがサブグラフと呼ばれるものである。図の凡例で示した検出されたサブグラフを点線で囲んだのちに番号を付け、全部で7つのカテゴリーとしている。なお、共起ネットワークの集計単位は、取捨選択として最小出現数

が7回以上、取捨選択の最小文書数は1として、上位50語を描画している。

第6表に1～7のカテゴリーと原文を参照して作成した文章を示した。カテゴリーの名称は、カテゴリー内の最頻出単語にもとづいて命名した。その結果、【1. 農業体験】、【2. E農場とボランティア】、【3. 北海道と自然】、【4. 大学との関係】、【5. 食との関係】、【6. 将来との関わり】、【7. 住み込みへの興味】の7つに分類することができた。

結果として、最上位の頻出単語群を含むカテゴリーは、農業体験と援農ボランティアに従事してみたいという直接的な動機をあらわしており、これはある意味で当然のことと言えよう。留意しなければならないのは、それ以外の「多様なカテゴリー」であり、援農ボランティアの応募者は、文字通りの多様な動機を抱いた存在と見るべきである。

前節の分析との関わりで言えば、E農場においてこれをカバーする取り組みがレクリエーションの企画であり、さらには同居して、3食を共にしながら一人一人のニーズをきめ細かく把握できることが「住み込み式」のメリットであろう。E農場の援農ボランティアの取り組みとボランティアへの対応は、直接的な動機（共通カテゴリー）と



第3図 志望動機の共起ネットワークの分析結果

資料：前表に同じ。

第6表 志望動機のカテゴリーと作成した文章

区分	番号	カテゴリー	文章
共通 カテゴリー	1	農業体験	・ 農業やファームステイに興味を持っているため、実際に体験してみたい。
	2	E農場とボランティア	・ E農場のホームページを見て、良いと感じ、農作業をやってみたいと思った。 ・ ボランティアを通して、E農場と他のボランティアの人たちとの交流を楽しみたい。
多様な カテゴリー	3	北海道と自然	・ 北海道の自然の中で生活してみたい。 ・ コロナで仕事が無くなり、今後の生活を考えた際に北海道の自然や農業を体験したいと思った。
	4	大学との関係	・ 大学で農業や地域経営学を学んでおり、学業に活かすために志望した。
	5	食との関係	・ 普段の食について、根本である農業を経験し、食を作る立場から考えてみたい。
	6	将来との関わり	・ 将来、就農を考えており、農業の経験を積んでおきたいと考えた。 ・ 将来、田舎に住んでみたいという思いがあり、その生活を体験したいと考えた。
	7	住み込みへの興味	・ 住み込み生活の中で、お話を聞いてみたい。

資料：前図に同じ。

多様な動機の双方にうまく対応することで成功を収め、長期継続が可能になっていると思われる。

5. 結論

以上を踏まえて、遠隔農業地域における住み込み援農ボランティアの成立要因について考察す

る。要点は、以下の3点に集約される。

まず第1に、ホームページを活用した情報発信である。遠隔農業地域における援農ボランティアは、大都市近郊の場合とは異なり、人を集めることがまず問題となる。E農場の援農ボランティアの取り組みには試行錯誤の経過があったが、安定して応募者を確保することができたのは、農場ホームページの開設以降である。また、魅力的なホームページを作成しているE氏自身のスキルが高く評価されるべきことも、見逃せないポイントであろう。

第2に、単なる労働力とは異なる援農ボランティアに対する受け入れ側の姿勢の問題である。繰り返しになるが、志願者は援農ボランティアを通じた農業体験に強い興味関心を抱いており、そのことに無関心な人間はそもそも応募しないと考えられるが、応募者の動機は実は多様であり、ひとつに限られるものでもない。E農場の事例は、受け入れ側とボランティアが寝食を共にする「住み込み式」であり、同じ空間で長い時間を過ごす利点をいかして、ボランティアの多様な動機を把握しようという姿勢を持っていた。そして、滞在期間における定期的な休日などを利用して、ボランティアの多様な動機に応えるようなレクリエーション企画を実践していることが、この取り組みの長期継続要因になっていると思われる。

第3に、援農ボランティアを受け入れる農場のコンセプトが、取り組みの核心に据えられている

ことにも注目したい。事例としたE農場のコンセプトは一貫して「人が集まる農場」をつくることであり、援農ボランティアや農泊、農家レストランもすべてこのコンセプトにもとづいて展開されてきた。そして、この「人が集まる農場」をつくるというコンセプトは、考えてみれば事例地域も含めて、現在の北海道農村に共通して求められる方向性であると言えるだろう。

もちろん、E農場における経営多角化の取り組みは、相応の投資がなければ展開できないものであり、事業のリスクを背負う覚悟も必要である。しかしながら、それがもたらす成果は大きいものがある。援農ボランティアについて言えば、ますます確保が困難になっている雇用労働力に依存しない大規模複合経営のモデルをつくりあげたのがE農場であり、北海道においてもおそらく唯一無二の存在と思われる。その意味で、事例としたE農場は遠隔農業地域の新たな可能性を切り拓いたパイオニアという位置づけをもち、そうした面が最も強くあらわれているのが、本研究で着目した住み込み援農ボランティアの取り組みと言えるのである。

引用文献

後藤光蔵・小口広太・北沢俊春・田中誠（2022）『都市農業の変化と援農ボランティアの役割：支え手から担い手へ』筑波書房。

要約

農業の担い手として、市民が農家の農作業を継続的に支援する援農ボランティアが期待されている。農業ボランティアは人を集めることが重要な課題であり、その多くは都市近郊において近隣住民を取り込むことで成立してきた。一方で北海道遠軽町のE農場は遠隔地でありながら、遠方から人を集め、住み込み式で課題に対処し、ボランティア応募者200人、参加者50人の実績をあげている。本論文では今後、遠隔農業地域の農業経営が労働力確保の面からも援農ボランティアを導入できるようになることを期待し、事例農場を遠隔農業地域における住み込み援農ボランティアの先進的な事例として位置づけ、その成立要因を考察した。その要点は、①ホームページを活用した情報発信、②魅力的な受け入れ体制、③受け入れ農場のコンセプトである。

キーワード：担い手、遠隔農業地域、援農ボランティア、テキストマイニング

